

## 酵素生物学&ダイイングコード合同若手会議に参加して

慶應義塾大学医学部 微生物学・免疫学教室 伊藤美菜子

私は、2016年1月26日から28日まで、千葉県にある一宮シーサイドオオツカで開催されました「酵素生物学」&「ダイイングコード」合同若手会議に参加しました。海が一望できるのびのびとした環境の中で、総勢100名ほどの研究者が活発に議論を交わしました。会議ではポストドク以下の若手セッションが設けられており、普段の領域会議では発表する機会のない大学院生やポストドクもたくさん発表されていました。酵素生物学とダイイングコードの合同会議というだけあって、内容が幅広く情報量も豊富で非常に勉強になりました。初日は若手セッションがありましたが、まず、フロアからの質問の多さに驚きました。発表者も的確に質問に答えており、座長の先生からストップがかかるまで質疑応答が続いていました。私たち大学院生にとってはこれほど多くの議論をしていただける機会はこれまでになく、貴重な経験であると思いました。1細胞レベルでナチュラルヘルパー細胞からのTh2サイトカインの産生をリアルタイムでイメージングや、Dectin-2の内因性リガンドを同定などレベルの高い演題が続き、とても興味深いと思うとともに、自分と同世代の方々が素晴らしい発表をしていることに刺激を受けました。

二日目も初日と同様にレベルの高い演題と活発な議論が繰り広げられました。私は脳虚血と細胞死に関与する研究としてインフラマソームの活性化制御メカニズムと脳梗塞について発表しました。様々な観点からの重要な質問をしていただき今後の研究に生かしていきたいと思いました。特別講演として、脂質研究の大家である国立国際医療研究センターの清水孝雄先生のご講演がありました。研究を始めたころのお話から現在も続けられている生体膜のリン脂質合成メカニズムに関するお話まで盛りだくさんの内容で、先生の偉大さが切に伝わってきました。ホスファチジルコリンや前駆体の生合成酵素をいくつも同定されておりました。その中でもリゾホスファチジルコリンアシル転移酵素(LPCAT)1が肺のサーファクタントに脂質であるDPPCの生合成に必要で、新生児の肺のサーファクタントへの関与も証明されており、基礎研究から臨床応用まで繋がる印象深い研究でした。

三日間、研究者の皆様と寝食を共にし、濃密な時間を過ごせました。特に、夕食後の懇親会では気さくな先生方を拝見し、研究の話からプライベートなことまで様々なお話を聴くことができました。皆様の研究への真摯な姿勢に感銘を受け、今後の研究生活への意欲が湧きました。

最後になりましたが、このような有意義な会議を開催して下さった酵素生物学領域代表の森泰正先生、ダイイングコード領域代表の田中正人先生、企画運営をして下さった関根先生、山口先生とラボメンバーの方々に感謝申し上げます。